様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３３２０１６３

研究課題名（和文）現代ヨーロッパの都市と住宅にかんする歴史的研究―田園都市からニュータウンへ―

研究課題名（英文）Historical Study of the Urban Development and Housing in Europe : fram the Garden City to the New Town

研究代表者
中野　隆生（NAKANO, TAKAO）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：９０１８９００１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　15,000,000円

研究成果の概要（和文）：　当初計画に即し、平成23、24、25年度に各4回、繰越による平成26年度に1回の研究会をおこなったほか、平成24年度にはシンポジウム「1920～1930年代のヨーロッパにおける都市と住宅―現代居住の源流を探る―」を、平成25年度には国際シンポジウム「20世紀の都市と住宅　ヨーロッパと日本―歴史的アプローチと未来へ展望―」を実施した。前者では20世紀前半欧州の都市居住を、後者では20世紀後半の都市と住宅を日欧比較を視野にいれて論じ、また学際的コメントを配して議論の拡張をはかった。平成27年度になって、論集『二十世紀の都市と住宅　ヨーロッパと日本』を刊行した。

研究成果の概要（英文）：We organized three or four research meetings par year, sometimes with participation of guest speakers, and particularly two symposiums, firstly in 2012 entitled "Urban development and Housing in Europe in 1920's and 1930's", secondly in 2013 "Urban Development and Housing in 20th Century : Europe and Japan". In the first, three of our members presented the European urban situation of the interwar period and discussed about the origin of today's living style. In the second, three historians we invited from UK, France and Germany, spoke about the urban society and its housing in their country after the Second World War; three Japanese specialists of European history talked about their own case studies; two historians of the 20th century Japan read a paper on the case of Tokyo; five specialists of different disciplines were asked to play a role of commentator and to enrich our argument. Based on these symposiums, we published in 2015 a collection of essays of the subject.

研究分野：人文学

キーワード：西欧近現代史　都市史　住宅史　経済史　建築史　国際的研究交流　学際的研究交流

１．研究開始当初の背景

（1）大衆社会的状況が現れた 19 世紀末～20 世紀初め、ヨーロッパの大都市では、都市基盤の整備が進むとともに、人口の流入、集中が生じて市街地が空間的に膨張し、新たな質の都市的矛盾が噴出するにいたった。なかでも、住宅の不足や劣悪さについて深刻さの度合いが増した。これら住宅をめぐる諸問題は、20 世紀に幾多の変転を経験し、今もなお都市問題のなかで大きな位置を占めている。

（2）1980 年代以降、20 世紀ヨーロッパの都市、住宅をその諸相においてとらえることが、現代社会をとらえる手掛かりと考えられ、英・仏・独それぞれの傾向を帯びつつ歴史研究の対象とされた。急速に研究が蓄積され、対象とされる年代も 20 世紀全体に広がった。英・仏・独の歴史研究は、まず自国の都市・住宅に焦点を合わせたが、当初からヨーロッパ全体を視界にとらえようという志向を孕み、早々に国際的比較の試みが出現した。

（3）西欧先進諸国の研究動向の影響もあって、日本で英・仏・独などを専門とする歴史家のなかにも、現代の都市・住宅へ関心を寄せる研究者が登場し、それぞれの問題関心に即して作業を進めた。もっとも、各々が専攻する地域や国については確かに研究も進んだが、地域や国の枠を超えた相互連携がなされることは少なく、ヨーロッパ諸国について専門的に研究する多数の歴史家がいる日本固有の利点を生かして研究の拡大・深化をはかる試みはなかった。

（4）20 世紀日本の都市・住宅にかんしていえば、建築史家によって少なからぬ成果がもたらされてきたが、その対象年代はほぼ第二次世界大戦後の復興より以前の時期にとどまっていた。また、大多数の現代史家にとって都市・住宅は関心の中心に置かれることはなかった。このあたりの事情はヨーロッパのそれとはかなり異なり、都市・住宅に焦点を合わせてヨーロッパと日本を比較することの困難さと必要性を感じていた。

（5）現代ないし 20 世紀を扱うからには地理学、社会学、政策学、建築学、等の諸学と連携しつつ歴史研究を遂行することは試みられて然るべきである。事実、ヨーロッパでも日本でも、建築学、都市計画学、地理学、社会学などとの協力から一定の成果が生まれてきた。ただ、現代の都市・住宅に的を絞り、ヨーロッパ諸国の相互比較や日欧比較を視野にいれた学際的交流は、本研究より以前にはほとんどなかった。

２．研究の目的

（1）現代ヨーロッパの都市をとらえるために、本研究は、都市の帯びる多種多様な側面のうち、とりわけ住宅、居住、居住空間に着目し、そこに焦点を合わせつつ接近を試みる。したがって、以下、研究の目的は、都市史と住宅史の双方に目配りしながら記される。

（2）英・仏・独における都市・住宅の歴史的現実やそれにかんする歴史研究の現状について共通点と相違点を抽出し全ヨーロッパ的規模で都市・住宅の現実、都市史・住宅史の眼差しを展望する。こうした点での認識を共有しながら、それを踏まえつつ、本研究のメンバーは、個々の専門領域において個別的な実証研究・問題提起をおこなう。そうすることで、現代ヨーロッパにおける都市、住宅、および社会にかんする歴史的理解を深め、日本の西洋史学界のみならず、英・仏・独の歴史学界にたいして学的貢献をめざすこととする。

（3）現代日本における都市・住宅の経験やそれにかんする研究の状況を把握して、ヨーロッパの同様な歴史的経験や歴史研究の現状と対比・検討し、国際的文脈のなかに日本の都市・住宅を位置づける。こうした試みは、いまや、日本のみならず、海外（ことにヨーロッパ）においても大きな意義を有し、学的貢献となりうるものである。

（4）現代の都市・住宅を対象とする学問には、歴史学のほかに、地理学、社会学、建築学、都市計画学、都市政策学、等々があり、視座や方法においてきわめて多様である。本研究は現代の都市・住宅研究における歴史的方法の可能性を探りながら、これら関連諸科学との交流を深め、多くを学び取りつつ学際的対話を進める。そのさい、効果的な社会的発信のあり方を不断に探索し、機会があれば、実地に発信する。

３．研究の方法

（1）英・仏・独などのヨーロッパ諸国や日本における都市・住宅の歴史的展開やそれをめぐる諸研究を扱った報告を中心に、1 年に 3～4 回の研究会を実施する。本研究メンバーがそれぞれの研究にもとづいて都市、住宅、社会に関連する知見を提示し、その報告をめぐって討論をおこなう。また、ゲストスピーターを招いて、ヨーロッパ諸地域や日本にかんする情報、関連諸学の視座・方法を得て、本研究に生かしていく。必要に応じて、本研究のあり方、方向性を議論し、シンポジウムの準備をおこなうための研究会を実施する。これら研究会活動の積み重ねによって、全メンバー間に現代の都市、住宅、社会について一定の共通認識を醸成する。

（2）全ヨーロッパを視野に入れて現代の都市・住宅を論じるという共通認識に立ちつつ、本研究メンバーは、各々、専門領域での実証研究を展開し、学術雑誌への論文掲載、研究書の刊行、学会での研究発表、シンポジウムへの参加、等々、様々な機会をとらえ、学的に貢献する。

（3）このような研究会活動、個別実証研究を踏まえて、2 度にわたるシンポジウムを組織し、本研究の成果を社会的に還元する。第 1 は、20 世紀英、仏、独の現代都市史・住宅史における基本的事象を提示して、その意味を再検討するシンポジウムである。原則とし

て本研究メンバーが報告を担うものとし、必要なら外部から論者を招いて補完する。第 2 のシンポジウムは、英、仏、独から専門家を招聘し、そのうえで、本研究メンバーが中心となって 20 世紀（ことに後半）の都市・住宅を論じる。そこに、日本にかんする報告、関連諸学からのコメントを加えて全体を構成する。

両シンポジウムをどう峻別するかは、本研究の流れのなかでを明確にして、具体化へ結びつける。

（4）以上の研究活動を踏まえ、論集を編纂・刊行し、研究成果を社会的に還元する。

４．研究成果

（1）2011～2013 年度に全部で 13 回の研究会（最終の第 13 回研究会は「繰越」により 2014 年度にはいって実施）をおこなった。報告者の内訳は、研究代表者、研究分担者、研究連携者、研究協力者からなる本研究メンバー11 名（史学 6 名、経済史学 3 名、建築史学１名、都市政策学１名）、ゲストスピーカー14 名（史学 3 名、経済史学 3 名、建築史学 3 名、建築学 2 名、地理学 2 名、都市計画学１名）であり、史学、経済史学、建築史学の専門家が主体を占めた。研究会では総数 20 の報告（シンポジウム向け準備報告は除外）がなされたが、対象とされた国ごとの報告数は、英２、仏４、独５、日２、米２、仏植民地３、国別区分不能２であった。本研究が複数の国・地域を視野にいれ、学際性を帯びていたことは明らかである。

（2）2012 年と 2013 年に実施したシンポジウムは、本研究を学的・社会的にアピールする重要な機会であった。名古屋の中京大学で開催した第１のシンポジウムでは、「1920～1930 年代のヨーロッパにおける都市と住宅―現代居住の源流を探る―」というタイトルのもと、両大戦間期の英・仏・独における都市・住宅のあり方が報告者の取り組む個別的な実証研究に即して紹介された。また、「現代居住の源流を探る」との設問にこたえて、歴史的実態と並んで、都市・住宅の現状を批判的にとらえようとの試みがなされた。他方で、翌年の第 2 シンポジウムへの継承・発展が強く意識されていた。第 2 のシンポジウム「20 世紀の都市と住宅　ヨーロッパと日本―歴史的アプローチと未来への展望―」は東京の日仏会館において開催され、第二次世界大戦終了以降の時期について、英、仏、独、日の都市・住宅が多角的に論じられた。当初から研究計画の一つの目標と位置づけられていたシンポジウムであり、本研究の国際性、学際性を担保し、広く社会に訴えかける役割を担っていた。英、仏、独から各１名、合わせて 3 名の歴史研究者（史学 2 名、建築史学 1 名）を招聘し、その一方で、国際性、学際性を顧慮しつつ日本側からの報告者、コメンテーターを配した。外国人を含む多様かつ多数の来場者を得て、幅広い議論を展開することができた。

これとは別に、招聘研究者 3 名には、それぞれの実証研究の成果を提示してもらう講演会を個々に設定した。結果的に、それは本研究のさらなる展開の方向性を探る絶好の機会になった。

（3）都市・住宅に即して、20 世紀の英、仏、独の社会を通観できたことは、本研究の大きな成果である。同時に、諸局面で英・仏・独のあいだに無視しがたい偏差のあったことが確認されたのも重要であった。たとえば、それぞれの都市化現象や別々の過程を辿った国家形成を背景に、福祉目的の住宅が、公営住宅（英）、低廉住宅（仏）、非営利住宅（独）と異なる呼称のもとに実現したこと、福祉的住宅の底流に横たわる「あるべき社会像」に違いがあって、それが田園都市、ニュータウンといった現代都市思想の受容に影響を及ぼしたらしいことなどが判明したのである。

大筋でいえば、ヨーロッパの 3 カ国は相互に情報を共有しつつ、類似の展開・変容を経験したように見える。この点で、検討対象の国や地域を増やすべきであるとの反省が生じた。さしあたり、先行研究の蓄積、等々から判断し、アメリカ合衆国、英・仏の旧植民地を視野に入れる努力を試みることとした。

もう一つの反省点は、学際的な交流につとめたものの、様々な事情があって、建築学、都市計画学との交流に顕著に傾斜する結果となった。より以上に開かれた学際的交流が目指されるべきである。

これらの反省から想定される研究の新展開においては、より大きな差異、偏差を孕む事象が視界にはいってくると思われる。したがって、住宅から都市を照射するという立場は堅持しつつも、本研究とは異なる角度からの都市のとらえ方に目配りし、都市史・住宅史へ立ち向かう視座や方法について、省察を深め、鍛え上げなければならない。

（4）本研究メンバーは、それぞれ個別に実証研究をつづけ、折に触れて、学術雑誌に公表し、学会報告をおこない、研究書として刊行してきた。とりわけ 2 回のシンポジウムをベースとしながら、論集『20 世紀の都市と住宅　ヨーロッパと日本』の刊行を実現することができた。これは本研究による成果の集大成である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１件）

（1）<u>北村昌史</u>、近現代ヨーロッパにおける都市と住宅をめぐって、『西洋史学』、253 号、2014、50‐62

（2）<u>松本裕</u>、残されし基礎・敷地と所有システムの行方、『建築雑誌』、Vol.127 NO.1631、2014、36－37

（3）<u>NAKANO Takao(中野隆生)</u>、La population

d ’ une cité-jardin de la banlieue parisienne: Suresnes, 1926-1936、『學習院大學文學部研究年報』、査読無、第 60 輯、2013、1－20
（４） HAGAI Masami(羽貝正美)、Reconstruction de l ’ autonomie de la ville et démocratie participative - essai sur la base de la modernisation des institutions locales et de l ’ espace public、『現代法学』、査読無、23・24 合併号、2013、161－182
（5）TSUBAKI Tatsuya(椿建也)、Model for a short-lived future ? Early tribulations of the Barbican redevelopment in the City of London, 1940-1982 、*Planning Perspectives*、査読有、Vol.27、2012、525－548
（6）北村昌史、互酬性から見た近代ドイツ社会―結社と社会国家、『パブリック/ヒストリー』、査読有、第 9 巻、2012、54－63
（7）羽貝正美、基礎自治体の景観を巡る政策循環プロセスと自治の基礎の再構築に関する実証的研究－長野県旧開田村の景観を巡る政策群を対象として―、『土木学会論文集（土木計画学）』、査読有、Vol.68、2012、160－179
（8）本内直樹、第二次世界大戦期イングランド北東部ミドルズバラ市の都市・住宅再建問題に関する住民意識調査の実態、『中部大学人文学部研究論集』、査読無、第 27 巻、2012、57－76
（9）永山のどか、19 世紀後半～1920 年代ドイツにおける企業家と住宅供給－ゾーリンゲン市の事例－（上・下）、『青山経済論集』、査読無、第 64 巻、2012、41－63、143－165
（10）松本裕、大都市近郊高密度工業集積地における都市空間形成に関する研究－大阪市における道路整備事業と東大阪市の都市的展開―、『大阪産業大学研究所叢書』、査読無、第 35 巻、2012、171－195
（11）本内直樹、第二次世界大戦期イングランド北東部の都市労働者・主婦層の居住環境と友人・隣人関係－『ミドルズバラ市の戦時社会調査』の史料から―、『国際比較研究』、査読有、第 7 巻、2011、3 - 33

〔学会発表〕（計１４件）
(1)KITAMURA Masahumi（北村昌史）、Forest Settlement of Bruno Taut in the Past and Present 、 International Joint Seminar ‘ Eorope in Times of Glocalisation ’、2014.10.28、 Bielefelt Universität
（2）本内直樹、戦後復興期イギリスの都市計画と団地コミュニティ－都市計画家マックス・ロックの「民主的計画」の検討―、シンポジウム「20 世紀の都市と住宅　ヨーロッパと日本－歴史的アプローチと未来への展望－」、2013.9.22-23、日仏会館
（3）永山のどか、第二次世界大戦後西ドイツ都市の住宅事情と住宅供給－ゾーリンゲン市の事例―、シンポジウム「20 世紀の都市と住宅　ヨーロッパと日本－歴史的アプローチと未来への展望－」、2013.9.22-23、日仏会館
（4）松本裕、パリにおける住環境整備と都市組織－第二次大戦後の北部・東部地域再開発から現代 ZAC（協議整備区域）への展開－、シンポジウム「20 世紀の都市と住宅　ヨーロッパと日本－歴史的アプローチと未来への展望－」、2013.9.22-23、日仏会館
（5）本内直樹、戦後復興期イギリス都市の社会調査と「民主的計画」－製鉄工業都市ミドルズバラ市の事例 1939-1951 年－、第 82 回社会経済史学会全国大会、2013.6.1、東京大学
（6）NAKANO Takao(中野隆生)、La population de la cite-jardin de Suresnes 1926-1946、Séminaire interlaboratoire de Paris-Est《 Ville et le territoire 》:《 Retour sur les cités-jardins 》、 Université de Paris=Est Marne-la-Vallée、2013.5.22
（7）中野隆生、両大戦間期パリの郊外形成とシュレーヌ田園都市の展開、中京大学経済学部附属経済研究所 2012 年度特別セミナー「1920～1930 年代のヨーロッパにおける都市と住宅－現代居住の源流を探る－」、2012.12.1、中京大学
（8）椿建也、イギリス両大戦間期の住宅と社会－公営住宅の到来と郊外化の進展－、中京大学経済学部附属経済研究所 2012 年度特別セミナー「1920～1930 年代のヨーロッパにおける都市と住宅－現代居住の源流を探る－」、2012.12.1、中京大学
（9）北村昌史、ブルーノ・タウトのジードルングの社会史－「森のジードルング」を手掛かりとして－、中京大学経済学部附属経済研究所 2012 年度特別セミナー「1920～1930 年代のヨーロッパにおける都市と住宅－現代居住の源流を探る－」、2012.12.1」、中京大学
（10）松本裕、近代都市再開発を通じた都市組織の重層化－19 世紀パリ大改造をめぐって－、第 5 回都市発生学研究会、2012.7.19、明治大学
（11）白川耕一、1970 年代の西ドイツにおける諸政党の家族政策観、日本西洋史学会第 61 回大会・小シンポジウム「家族と社会国家－20 世紀ドイツにおける包摂のダイナミズム－」、2011.5.15、日本大学
（12）MATSUMOTO Yutaka(松本裕)、Den ’ en toshi-les cités-jardin 、 The 43th International Research Symposium : “ Pour un vocabulaire de la spacialité japonaise ”、2012.5.11-13、国際日本文化研究センター
（13） KITAMURA Masahumi(北村昌史)、Stadttilentwicklungsgeschichte von Kujo und ihr Umgebung、International Symposium《 Stadtteil und Gemütlichkeit zu gestalten 、 2011.11.1 、 Hafen City University (Hamburg)
（14）本内直樹、イギリスの戦後復興ヴィジ

ョンと都市計画―歴史研究の視点から―、中部大学大学院国際人間学研究所専攻連携シンポジウム、2011.10.5、中部大学

〔図書〕（計　５件）
（1）中野隆生、椿建也、本内直樹、松本裕、北村昌史、永山のどか、白川耕一、羽貝正美、平野奈津恵、他、山川出版社、二十世紀の都市と住宅　ヨーロッパと日本、2015、482
（2）白川耕一　他、彩流社、＜近代規範＞の社会史―都市・身体・国家―、2013、300＋45
（3）椿建也、勁草書房、イギリス住宅政策史 1914～45 年―公営住宅の到来と郊外化の進展―、2013、113＋*1i*
（4）永山のどか、日本経済評論社、ドイツ住宅問題の社会経済史―福祉国家と非営利住宅政策―、2013、333
（5）中野隆生　他、山川出版社、増補　歴史遊学、2011、286

６．研究組織
(1)研究代表者
中野　隆生　（ナカノ　タカオ）
　学習院大学・文学部・教授
　研究者番号：90189001

(2)研究分担者
椿　建也　　（ツバキ　タツヤ）
　中京大学・経済学部・教授
　研究者番号：50278248
北村　昌史　　（キタムラ　マサフミ）
　大阪市立大学・文学研究科・教授
　研究者番号：20242993
羽貝　正美　　（ハガイ　マサミ）
　東京経済大学・現代法学部・教授
　研究者番号：60208410
本内　直樹　　（モトウチ　ナオキ）
　中部大学・人文学部・准教授
　研究者番号：10454365
永山　のどか　（ナガヤマ　ノドカ）
　青山学院大学・経済学部・准教授
　研究者番号：20547517
白川　耕一　　（シラカワ　コウイチ）
　首都大学東京・人文科学研究科・研究員
　研究者番号：40444939
松本　裕　　（マツモト　ユタカ）
　大阪産業大学・デザイン工学部・准教授
　研究者番号：20268246

(3)連携研究者

(４)研究協力者
平野　奈津恵　（ヒラノ　ナツエ）
　日本女子大学・文学部・学術研究員
　研究者番号：60634904
犬飼　崇人　　（イヌカイ　タカヒト）
　学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程